吉野川 紀の川 流域連携で地域活性化

水源地の村・川上から「協働取り組み」推進

川上村の公益財団法人「吉野川紀の川源流物語」（理事長・栗山忠昭村長）は平成27年度、環境省の「地域活性化に向けた協働取組の加速化事業」（協働加速化事業）の採択を受け、環境教育などを通じて、吉野川紀の川流域で暮らす人々や産業をつなぐ「流域連携」に取り組んだ。国土の荒廃や過疎化など山村が抱える課題を解決するため、流域連携によって地域の活性化につなげる川上村の取り組みが注目を集めることになりそうだ。

「吉野川紀の川源流物語」一次産業を素材に教材化

▼源流の日を制定

川上村では、毎年11月16日を「源流の日」とする村条例を定めた。平成26年同日に開催された第34回「全国豊かな海づくり大会～やまと～」放流・歓迎行事において、天皇、皇后両陛下が訪れ、おおたき龍神湖にアユとアマゴを放流されたことを記念している。

また同年9月に川上村で第5回全国源流サミットが開催され、全国源流の郷協議会加盟の9県19市町村の代表や近隣自治体関係者、一般市民ら約500人が参加。国土保全の観点から、「流域圏」としての連携をを具現化させていく必要性が提唱された。

この2つの大きなできごとを受けて、同財団法人では、平成27年度の事業計画で「真の流域連携」の具現化に向けた持続可能なモデルづくりを目指す活動に着手、着実な動きをはじめている。

「水源地の森」でワークショップ森編

ため池維持の問題を知る

農業用水の流れを追う＝藤崎頭首工

▼ESDでの教材

同財団法人は環境省の27年度協働過疎化事業の公募に対し、「紀の川（吉野川）流域の地域産業をESD（持続可能な開発のための教育）の視点でいかす教材化」をテーマに申請し、全国17団体の一つとして採択を受けた。

吉野川紀の川流域は、全国的にも高い質を誇る林業、農業、漁業の第一次産業でつながっているのが大きな特徴。源流域では高齢化・過疎化が急速に進むが、後継者不足の問題は、林業・農業・漁業の持続を難しくしている共通した現状がある。

そこで同事業では、吉野川紀の川流域の第一次産業を持続させることは、自然とともにあった生業と生きる技や知恵を継承することであり、地域の産業を活かすことは、地域の環境や風土を生かすことにつながる。山や大地や海、川などの自然に負荷をかけない暮らしを盛り上げていくことーを流域連携の目標に掲げた。

具体的には、持続可能な社会づくりの担い手「教育」のために、紀の川がつなぐ林業、農業、漁業にまつわる「恵み」「技や知恵」「ひと」などを素材に教材を作成して、流域での活用をはかることにした。

河口の干潟の現状を学ぶ

▼協働キーパソン

同財団法人では「森と水の源流館」（川上村迫）の運営を通じて、流域での多様なネットワークを広げている。

今回の協働加速化事業でも、下流域では和歌山市和歌浦のしらす漁師の髙井宏氏（和歌山県漁業士連絡協議会）、中流域では紀の川市にある紀ノ川農業協同組合長の宇田篤弘氏、源流域では、川上村で3年目を迎えた地域おこし協力隊として、流域の特産品の販売を手掛ける村上航氏と川上村水源地課を協働のキーパーソンとして取り組んだ。また和歌山市立教育研究所専門教育監の市川圭造氏、流域12市町村によって構成される吉野川紀の川流域協議会とも協働の連携を深めた。

ESD（Education for Sustainable Development）
持続可能な未来や社会づくりのために行動できる人の育成を目的とした教育のこと。環境、人権、健康福祉、多文化共生、まちづくりなどのさまざまなテーマがある。2002年のヨハネスブルグサミットにおいて日本が「持続可能な開発のための教育の10年（ESDの10年）」を提案し、同年の国連総会で、2005年から2014年までをESDの10年として採択された。これを受け、国際的な取り組みとして、現在ESDは各国で進められている。

協働取り組みのプロセス

▶平成27年６月
流域の５つの自治体・教育委員会への聞取調査を開始

▶同年８月～10月
環境活動グループ、企業、林業・農業・漁業の従事者、学校の先生や博物館の学芸員など、のべ15団体へのヒアリングを実施。

中流域で環境貢献に取り組む企業ヒアリング（築野食品工業株式会社）

▶同年11月・12月
「森」「大地」「海」でワークショップを実施し、40を超える団体が参加。「教材化」を検討。

▶平成28年２月６日
全国の採択団体による報告会が東京で行われた。この取り組みは、奈良県と和歌山県の県を超え、また「吉野川紀の川流域協議会」の自治体を巻き込んだ協働取り組みとして注目された。

ESD つなげ、考え、行動へ

吉野川紀の川源流物語 尾上忠大事務局長に聞く

―協働加速化事業でESDに取り組んだ感想は。

尾上　事業の過程では、聞き取り先の選定や日程調整、ワークショップでは現地視察のコース設定や調整など、流域のキーパーソンや吉野川紀の川流域協議会に主要な役割を担ってもらいました。いまでは「ESD」という言葉が流域の課題解決につながるような期待感をもって、それぞれの口から出るようになりました。

もっと流域を知る、人と出会う、話すための機会づくりを継続して行っていくことを「教材」として、この協働チームから提案すべきという合意形成もできました。この「つながり」を発展させながら、紀の川吉野川とともにある産業を持続させ、環境や景観、そして文化を持続させることができるよう活動を続けることが期待されています。

―今後の展開について。

尾上　いま、ようやく全国規模で森と海のつながりが注目され、行動化が促され始めています。

一時的な大雨が降り、毎年どこかで大規模な自然災害が起きるわが国では、治水などの面で、山や森林の荒廃は山村だけの問題ではありません。中流域の農家でも環境保全型の農業を持続する意義を共有し、それを商品の価値・価格として評価する文化を根付かしていく必要があります。漁業でも、気候変動とともに漁獲の量・質、種類にどんどんと影響が出ているといわれます。

そのような中でも吉野川紀の川の恵みによって、豊かな海が保たれているとすれば、いったい何を続けて、何を改善すればいいのか、流域みんなで学び、考え、行動していかなければなりません。

今年度の動きをさらにいかして、「紀の川（吉野川）じるしのESD」として掲げ、次年度以降も流域の多様な人をつなぐ場をつくり、ともに考え、それぞれの行動となる事業に取り組んで行きたいと考えています。

吉野川紀の川源流物語・尾上忠大事務局長

未来へひきつぐ活動報告

「森里川海」ミニフォーラム 森と水の源流館で開催

環境省の「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトの一環で、吉野川紀の川流域をテーマにしたミニフォーラムが2月8日、川上村迫の森と水の源流館で開かれた。

同プロジェクトは国民共通の課題として、豊かな自然環境を守り支える社会づくりを目指す取り組み。ミニフォーラムは全国50カ所で開催され、同月20日に富山市で総括シンポジウムが行われた。

川上村は「水源地の村」として、源流部の原生林を保全するとともに、下流域の和歌山市と水源地保護に関する協定を結ぶなど積極的に流域との交流を進めてきた。

同フォーラムでは、環境学習施設である同館の「水源地の森シアター」が会場に選ばれた。通常は映像上映だけが行われる同シアターの原生林のジオラマを背景に、同村や和歌山県から参加した約50人が「地域で残したい森里川海や森里川海と人とのつながり、それを未来へとひきつぐ取り組み」について意見を交換した。

原生林のジオラマを背景に意見を交換するミニフォーラム参加者ら＝２月８日、森と水の源流館

奈良県川上村
森と水の源流館　http://www.genryuu.or.jp
入館料／一般（高校生以上）400円（300円）
小・中学生200円（150円）
（　　）：25名様以上団体割引
開館時間／9:00～17:00（入館受付は16:30まで）
毎週水曜休館
〒639-3553 奈良県吉野郡川上村迫590-2（宮の平）
電話 0746-52-0888　FAX 0746-52-0388
公益財団法人
吉野川紀の川源流物語